

中1ギャップへの対応に関する研究

－児童への授業実践と小・中学校教員の合同研修を通して－

長期研究員 遠藤 寛之

I 研究の趣旨

福島県教育委員会は、「福島県の暴力行為、いじめ、不登校、中途退学調査結果について」（2013）の中で、いわゆる「中1ギャップ※」の解消を本県の課題の一つにあげている。また、県内の小・中学校においても校種間接続期の児童生徒の不適応問題解決に向けて様々な取組が行われているが、顕著な改善は見られていないのが実状である。

本来、環境の変化に伴う物理的・心理的ギャップは人生において多々存在しており、その存在そのものをなくすことは難しい。そのような視点に立った時、小学校から中学校へと環境が大きく変化する中で生じる様々なギャップを周りの大人が憂え、忌避しようとするだけでは、児童生徒の成長にはつながりにくい。加えて、小・中学校教員に「9年間で児童生徒の発達をつなぐ」という視点が十分に共有されなければ、ギャップを乗り越えるための力を系統的に児童生徒に体得させることも難しい。

そこで本研究では、いわゆる「中1ギャップ」を児童生徒の成長の機会ととらえ、児童に「ギャップに備える力」を身に付けさせるとともに、小・中学校教員の連携に対する意識の深化を図ることで、この課題へ対応していきたいと考え、本主題を設定した。

※ 中学校進学という環境の変化に伴い、生徒の不安やストレスが問題行動となって多く発現すること。

II 研究の概要

1 研究仮説

児童生徒が新たな環境に適応するために必要な「ギャップに備える力」を明らかにした上で、それらをもつための授業を実践するとともに、ねらいを明確にした小・中学校教員の合同研修を行えば、児童に「ギャップに備える力」を身に付けさせることができ、小・中学校教員の連携に対する意識の深化も図られるであろう。

2 研究の内容と実際

(1) 研究対象

同一村内の小学校3校と中学校1校の児童・生徒・教員

(2) 「ギャップに備える力」の明確化

① 先行研究から

岡山県総合教育センター（2014）は、中1ギャップの解決には児童生徒の人間関係を築く力をはぐくむことが重要であると指摘している。また都筑（2008）は、中学校入学後に希望を持って学校生活を送るためには、小学校で自尊心を高めることが重要であるとしている。

② 児童・生徒・教員の意識調査から

小学校6学年児童（32名）対象の「中学校進学についてのアンケート」において、「中学校進学後の友だち関係に不安を感じている」と回答した児童の割合は31%であった。一方、中学校1学年生徒（34名）対象の「中学校入学後のアンケート」からは、入学当初は友だち関係に不安を感じながらも、自分から友だちに話しかけたり、友だちをつくろうとしたりしたことで、友だち関係への不安を解消することができた生徒がいたことも分かった。このことから、友だちとのよりよい関係を築く力をはぐくむことが、いわゆる「中1ギャップ」の改善を図る上で重要であることが確認できた。加えて教員の多くが、児童生徒の自己肯定感や人と関わるスキルの低さを感じていることなども分かった。

③ 「ギャップに備える力」の設定

①②の結果から、友だちとよりよい関係を築くことができる「友だちと関わる力」と、自分自身を大切にすることができる「自己肯定感」を、本研究における「ギャップに備える力」と位置付けた。

(3) 「ギャップに備える力」を身に付けさせるための授業実践

友だちとよりよい関係を築くための具体的な言動について考えさせたり、自分の長所や短所を理解させることを通して自分自身を大切にしようとする気持ちを高めさせたりすることを目的として、道徳の時間において予防・開発的教育相談の視点を取り入れた授業を実践した（図1、図2）。

学年	授業の内容
1	資料を読み、ケンカをした二人の登場人物の仲直りの仕方を考えさせ、仲直りのロールプレイを通して、仲直りできた時の気持ちに気付かせる。
2	プロジェクトアドベンチャー（以下、PA）の「拍手おくり」を通して、友だちと協力して課題を解決することの楽しさを感じさせる。
3	構成的グループエンカウンター（以下、SGE）の「ふわふわ言葉とちくちく言葉」を通して、友だちに対して遣っている言葉を振り返らせ、言葉によって自分や友だちの気持ちが変わることに気付かせる。
4	PAの「風船列車」を通して、友だちと協力して課題を解決することの楽しさや難しさに気付かせる。
5	アサーションの考え方を取り入れたロールプレイを通して、関わり方のちがいで相手の気持ちが変わることに気付かせる。
6	PAの「パイプライン」を通して、友だちと協力して課題を解決しようとする時の自分の心情に気付かせる。

図1 「友だちと関わる力」を高めるための授業

学年	授業の内容
1	資料を読み、登場人物を大切に思っている人には誰がいたかを話し合わせ、自分にも自分のことを大切にしてくれる人があることに気付かせる。
2	自分が生きていると感じる時はどんな時か、またその時に自分と関わっているのは誰かを自分の写真の周りに書かせたり、自分の写真を取り外した時の気持ちを考えさせたりすることで、自分の存在の大切さに気付かせる。
3	SGEの「いいとこさがし」を通して、自分のよい所を友だちに見つけてもらい、自分では気付くことができなかった自分のよさに気付かせる。
4	自分の長所・短所をワークシートに記入させた後、「長所だけの自分だったら」どんな気持ちになるかを話し合わせながら、長所と短所の両方があることその自分であることに気付かせる。
5	自分の長所・短所や今後どのような自分になりたいかをワークシートに記入させ、自分を伸ばす方法を考えさせる。
6	自分の資源（以下、リソース）をワークシートに記入させ、今後不安なことがあった時に、自分のリソースをどのように活用すればよいかを考えさせる。

図2 「自己肯定感」を高めるための授業

(4) 小・中学校教員対象の合同研修

小・中学校教員の連携に対する意識を高めるため、『中1ギャップ』の改善のためにできることをテーマに、合同研修会を実施した。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

児童の「友だちと関わる力」と「自己肯定感」に関する意識の変容を把握するため、授業実践の事前・直後・事後に4件法による意識調査を行った。

(1) 「友だちと関わる力」について

「友だちと仲よくしている」という意識は事前調査段階から高かったが（図3）、授業の中で意図的に友だちと関わらせた結果、「協力することが少ないので、改めて協力の大切さが分かった（6年生）」「協力は簡単だと思っていたら難しかった（4年生）」

など、友だちと関わることの大切さや難しさに改めて気付く児童の姿が見られるようになった。また、小学校6学年児童対象の「中学校進学についてのアンケート」からは、中学校進学後の友だち関係に不安を感じている児童の割合が授業実践の前後で31%から19%に減少しており、今回の授業が不安感の軽減に寄与したことが推察された。

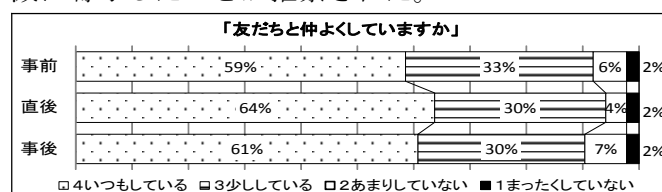


図3 「友だちと関わる力」についての意識調査
(2) 「自己肯定感」について

図4から、「自分を大切にしたいと思う」という意識が授業直後に高まったことが確認できた。また、授業の中で意図的に自分の内面に向き合わせたことで、「中学校のことで不安があるけど自分のリソースを大切にしたい（6年生）」「友だちに自分のよい所を見つけてもらってうれしかった（3年生）」など、自分を支えてくれているものや自分自身のよさに気付く児童の姿も数多く見られるようになった。

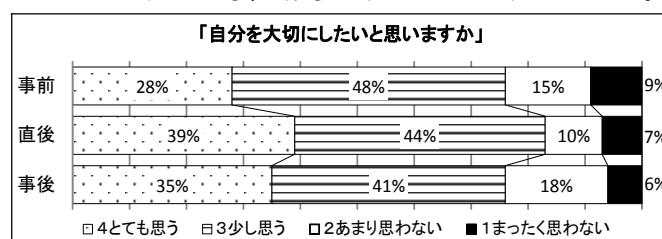


図4 「自己肯定感」についての意識調査

(3) 「小・中学校教員対象の合同研修」について

教員同士が熱心に意見を交わしていた姿や、「今後も小・中学校の連携を進めたい」といった感想から、研修の有効性と教員が連携の必要性を感じていることを確認することができた。

2 今後の課題

授業直後に高まった児童の意識が事後調査段階では低下していたことから、今後も継続的に「友だちと関わる力」と「自己肯定感」を高めるための実践を行い、児童に「ギャップに備える力」を身に付けさせていきたい。また、小・中学校教員の連携への意識をさらに高めるためにも、研修や交流する機会が設定されるように働きかけていきたい。